杜子春

芥川龍之介

一

或春の日暮です。

唐の都長安の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでゐる、一人の若者がありました。

若者は名は杜子春といつて、元は金持の息子でしたが、今は財産を費ひ盡して、その日の暮しにも困る位、憐な身分になつてゐるのです。

何しろその頃長安といへば、天下に並ぶものの無い、繁昌を極めた都ですから、往來にはまだしつきりなく、人や車が通つてゐました。門一ぱいに當つてゐる、油のやうな夕日の光の中に、老人のかぶつた紗の帽子や、土耳古の女の金の耳環や、白馬に飾つた色糸の手綱が、絶えず流れて行く容子は、まるで畫のやうな美しさです。

しかし杜子春は相變らず、門の壁に身を凭せて、ぼんやり空ばかり眺めてゐました。空には、もう細い月が、うららと靡いた霞の中に、まるで爪の痕かと思ふ程、かすかに白く浮んでゐるのです。

「日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行つても、泊めてくれる所はなささうだし——こんな思ひをして生きてゐる位なら、一そ川へでも身を投げて、死んでしまつた方がましかも知れない。」

杜子春はひとりさつきから、こんな取りとめもないことを思ひめぐらしてゐたのです。

するとどこからやつて來たか、突然彼の前へ足を止めた、片目眇の老人があります。それが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落すと、じつと杜子春の顔を見ながら、

「お前は何を考へてゐるのだ。」と、横柄に言葉をかけました。

「私ですか。私は今夜寢る所もないので、どうしたものかと考へてゐるのです。」

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思はず正直な答をしました。

「さうか。それは可哀さうだな。」

老人は暫く何事か考へてゐるやうでしたが、やがて、往來にさしてゐる夕日の光を指さしながら、

「ではおれが好いことを一つ教へてやらう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その頭に當る所を夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まつてゐる筈だから。」

「ほんたうですか。」

杜子春は驚いて、伏せてゐた眼を擧げました。所が更に不思議なことには、あの老人はどこへ行つたか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見當りません。その代り空の月の色は、前よりも猶白くなつて、休みない往來の人通りの上には、もう氣の早い

二

杜子春は一日の内に、長安の都でも唯一人といふ大金持になりました。あの老人の言葉通り、夕日に影を映して見て、その頭に當る所を、夜中にそつと掘つて見たら、大きな車にも餘る位、黄金が一山出て來たのです。

大金持になつた杜子春は、すぐに立派な家を買つて、玄宗皇帝にも負けない位、贅澤な暮しをし始めました。蘭陵の酒を買はせるやら、桂州の龍眼肉をとりよせるやら、日に四度色の變る牡丹を庭に植ゑさせるやら、白孔雀を何羽も放し飼ひにするやら、玉を集めるやら、錦を縫はせるやら、香木の車を造らせるやら、象牙の椅子を誂へるやら、その贅澤を一々書いてゐては、いつになつてもこの話がおしまひにならない位です。

するとかういふ噂を聞いて、今までは路で行き合つても、挨拶さへしなかつた友だちなどが、朝夕遊びにやつて來ました。それが又それも一日毎に數が増して、半年ばかり經つ内には、長安の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ來ないものは、一人もない位になつてしまつたのです。杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒盛りを開きました。その酒盛りの又盛なことは、中々口には盡されません。極かいつまんだゞけをお話しても、杜子春が金の杯に西洋から來た葡萄酒を汲んで、天竺生れの魔法使が刀を呑んで見せる藝に見とれてゐるとそのまはりには二十人の女たちが、十人は翠翡の蓮の花を、十人は瑪瑙の牡丹の花を、いづれも髪に飾りながら、笛や琴を節面白く奏してゐるといふ景色なのです。

しかしいくら大金持でも、御金には際限がありますから、さすがに贅澤屋の杜子春も、一年二年と經つ内には、たんだん貧乏になり出しました。さうすると人間は薄情なもので、昨日までは毎日來た友だちも、今日は門の前を通つてさへ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになつて見ると、廣い長安の都の中にも、彼に宿を貸さうといふ家は、一軒もなくなつてしまひました。いや、宿を貸す所か、今では碗に一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。

そこで彼は或日の夕方、もう一度あの長安の西の門の下へ行つて、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立つてゐました。するとやはり昔のやうに、片目眇の老人が、どこからか姿を現して、

「お前は何を考へてゐるのだ。」と、聲をかけるではありませんか。

杜子春は老人の顔を見ると、恥しさうに下を向いた儘、暫くは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切さうに、同じ言葉を繰返しますから、こちらも前と同じやうに、

「私は今夜寢る所もないので、どうしたものかと考へてゐるのです。」と、恐る恐る返事をしました。

「さうか。それは可哀さうだな。ではおれが好いことを一つ教へてやらう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その胸に當る所を、夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まつてゐる筈だから。」

老人はかう言つたと思ふと、今度も亦人ごみの中へ、掻き消すやうに隱れてしまひました。

杜子春はその翌日から、忽ち天下第一の大金持に返りました。と同時に相變らず、仕放題な贅澤をし始めました。庭に咲いてゐる牡丹の花、その中に眠つてゐる白孔雀、それから刀を呑んで見せる、天竺から來た魔法使――すべてが昔の通りなのです。

ですから車に一ぱいあつた、あの夥しい黄金も、又三年ばかり經つ内には、すつかりなくなつてしま

ひました。

三

「お前は何を老へてゐるのだ。」

片目眇の老人は、三度杜子春の前へ來て、同じことを問ひかけました。勿論彼はその時も、長安の西の門の下に、ぼそぼそと霞を破つてゐる三日月の光を眺めながら、ぼんやり佇んでゐたのです。

「私ですか。私は今夜寢る所もないので、どうしようかと思つてゐるのです。」

「さうか。それは可哀さうだな。ではおれが好いことを敎へてやらう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その腹に當る所を、夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの——」

老人がここまで言ひかけると、杜子春は急に手を擧げて、この言葉を遮りました。

「いや、お金はもう入らないのです。」

「金はもう入らない？　ははあ、では奢澤をするにはとうとう飽きてしまつたと見えるな。」

老人は審しさうな眼つきをしながら、じつと杜子春の顏を見つめました。

「何、奢澤に飽きたのぢやありません。人間といふものに愛想がつきたのです。」

杜子春は不平さうな顏をしながら、突慳貪にかう言ひました。

「それは面白いな。どうして又人間に愛想が盡きたのだ？」

「人間は皆薄情です。私が大金持になつた時には、世辭も追從もしますけれど、一旦貧乏になつて御覽なさい。柔しい顏さへもして見せはしません。そんなことを考へると、たとひもう一度大金持になつた所が、何にもならないやうな氣がするのです。」

老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや突ひ出しました。

「さうか。いや、お前は若い者に似合はず、感心に物のわかる男だ。ではこれからは貧乏をしても、安らかに暮して行くつもりか。」

杜子春はちよいとためらひました。が、すぐに思ひ切つた調子で眼を擧げると、訴へるやうに老人の顏を見ながら、

「それも今の私には出來ません。ですから私はあなたの弟子になつて、仙術の修業をしたいと思ふのです。いいえ、隱してはいけません。あなたは道德の高い仙人でせう。仙人でなければ、一夜の内に私を天下第一の大金持にすることは出來ない筈です。どうか私の先生になつて、不思議な仙術を敎へて下さい。」

老人は眉をひそめた儘、暫くは默つて、何事か考へてゐるやうでしたが、やがて又につこり笑ひながら、

「いかにも私は峨眉山に棲んでゐる、鐵冠子といふ仙人だ。始めお前の顏を見た時、どこか物わかりが好ささうだつたから、二度まで大金持にしてやつたのだが、それ程仙人になりたければ、私の弟子にとり立ててやらう。」と、快く願を容れてくれました。

杜子春は喜んだの、喜ばないのではありません。老人の言葉がまだ終らない内に、彼は大地に額をつけて、何度も鐵冠子に御時宜をしました。

「いや、さう御禮などは言つて貰ふまい。いくら私の弟子にした所が、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第できまることだからな。——が、兎も角もまづ私と一しよに、峨眉山の奥へ來て見るが好い。おお、幸、こゝに竹杖が一本落ちてゐる。では早速これへ乘つて、一飛びに空を渡るとしよう。」

鐵冠子はそこにあつた青竹を一本拾ひ上げると、口の中に呪文を唱へながら、杜子春と一しよにその竹へ、馬にでも乘るやうに跨りました。すると不思議ではありませんか。竹杖は忽ち龍のやうに、勢よ

く大空へ舞ひ上つて、晴れ渡つた春の夕空を峨眉山の方角へ飛んで行きました。

杜子春は膽をつぶしながら、恐る恐る下を見下しました。が、下には唯青い山々が夕明りの底に見えるばかりで、あの長安の都の西の門は、(とうに霞に紛れたのでせう。)どこを探しても見當りません。その内に鐵冠子は、白い鬚の毛を風に吹かせて、高らかに歌を唱ひ出しました。

朝に北海に遊び、暮には蒼梧。
袖裏の青蛇、膽氣粗なり。
三たび嶽陽に入れども、人識らず。
朗吟して、飛過す洞庭湖。

四

二人を乘せた青竹は、間もなく峨眉山へ舞ひ下りました。

そこは深い谷に望んだ、幅の廣い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だと見えて、中空に垂れた北斗の星が、茶碗程の大きさに光つてゐました。元より人跡の絶えた山ですから、あたりはしんと靜まり返つて、やつと耳にはひるものは、後の絶壁に生えてゐる、曲りくねつた一株の松が、こうこうと夜風に鳴る音だけです。

二人がこの岩の上へ來ると、鐵冠子は杜子春を絶壁の下に坐らせて、

「私はこれから天上へ行つて、西王母に御眼にかかつて來るから、お前はその間ここに坐つて、私の歸るのを待つてゐるが好い。多分私がゐなくなると、いろいろな魔性が現れて、お前をたぶらかさうとするだらうが、たとひどんなことが起らうとも、決して聲を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだと覺悟をしろ。好いか。天地が裂けても、默つてゐるのだぞ。」

と言ひました。

「大丈夫です。決して聲などは出しはしません。命がなくなつても、默つてゐます。」

「さうか。それを聞いて、おれも安心した。ではおれは行つて來るから。」

老人は杜子春に別れを告げると、又あの竹杖に跨つて、夜目にも削つたやうな山々の空へ、一文字に消えてしまひました。

杜子春はたつた一人、岩の上に坐つた儘、靜に星を眺めてゐました。すると彼是半時ばかり經つて、深山の空氣が肌寒く薄い着物に透り出した頃、突然空中に聲があつて、

「そこにゐるのは何物だ。」と、叱りつけるではありませんか。

しかし杜子春は仙人の敎通り、何とも返事をしずにゐました。

所が又暫くすると、やはり同じ聲が響いて、

「返事をしないと、立ち所に、命はないものと覺悟をしろ。」と、いかめしく嚇しつけるのです。

杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに坐つてゐました。

と、どこから登つて來たか、爛々と眼を光らせた虎が一匹、忽然と岩の上に躍り上つて、杜子春の姿を睨みながら、一聲高く嗥りました。のみならずそれと同時に、頭の上の松の枝が、烈しくざはざは搖れたと思ふと、後の絶壁の頂からは、四斗樽程の白蛇が一匹、炎のやうな舌を吐いて、見る見る近くへ下りて來るのです。

杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに坐つてゐました。

虎と蛇とは、一つ餌食を狙つて、互に隙でも窺ふのか、暫くは睨合ひの體でしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が虎の牙に噛まれるか、蛇の舌に呑まれるか、杜子春の命は瞬く内に、なくなつてしまふと思つた時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失せて、後には唯、絶壁の松が、さつきの通りこうこうと枝を鳴らしてゐるばかりなのです。杜子春はにつこり笑ひながら、今度はどんなことが起るかと、心待ちに待つてゐました。

すると一陣の風が吹き起つて、墨のやうな黑雲が一面にあたりをとざすや否や、うす紫の稻妻がやにはに闇を二つに裂いて、凄じく雷が鳴り出しました。いや、雷ばかりではありません。それと一しよに瀑のやうな雨もいきなりどうどうと降り出したのです。

杜子春はこの天變の中に、恐れ氣もなく坐つてゐました。風の音、雨のしぶき、それから絶え間ない稻妻の光、――暫くはさすがの峨眉山も、覆るかと思ふ位でしたが、その内に耳をもつんざく程、大きな雷鳴が轟いたと思ふと、空に渦卷いた黑雲の中からまつ赤な一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかゝりました。

杜子春は思はず耳を抑へて、一枚岩の上へひれ伏しました。が、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴れ渡つて、向うに聳えた山々の上にも、茶

碗程の北斗の星が、やはりきらきら輝いてゐます。して見れば今の大あらしも、あの虎や白蛇と同じやうに、鐵冠子の留守をつけこんだ、魔性の惡戯に違ひありません。杜子春は漸く安心して、ほつとため息をつきながら、又岩の上に坐り直しました。

が、そのため息がまだ消えない内に、今度は彼の坐つてゐる前へ、金の鎧を着下した、身の丈三丈もあらうといふ、嚴かな神將が現れました。神將は手に三叉の戟を持つてゐましたが、いきなりその戟の切先を杜子春の胸もとへ向けながら、眼を瞋らせて叱りつけるのを聞けば、

「こら、その方は一體何物だ。この峨眉山といふ山は、天地開闢の昔から、おれが住居をしてゐる所だぞ。それも憚らずたつた一人、こゝへ足を踏み入れるとは、よもや唯の人間ではあるまい。さあ命が惜しかつたら、一刻も早く返答しろ。」と言ふのです。

しかし杜子春は老人の言葉通り、默然と口を噤んでゐました。

「返事をしないか。――しないな。好し。しなければ、しないで勝手にしろ。その代りおれの眷屬たちが、その方をずたずたに斬つてしまふぞ。」

神將は戟を高く擧げて、向うの山の空を招きました。その途端に闇がさつと裂けると、驚いたことには無數の神兵が、雲の如く空に充滿ちて、それが皆槍や刀をきらめかせながら、今にもこゝへ一なだれに攻め寄せようとしてゐるのです。

この景色を見た杜子春は、思はずあつと叫びさうにしましたが、すぐに又鐵冠子の言葉を思ひ出して一生懸命に默つてゐました。神將は彼が恐れないのを見ると、怒つたの怒らないのではありません。

「この剛情者め。どうしても返事をしなければ、約束通り命はとつてやるぞ。」

神將はかう喚くが早いか、三叉の戟を閃かせて、一突きに杜子春を突き殺しました。さうして峨眉山もどよむ程、から〳〵と高く笑ひながら、どこともなく消えてしまひました。勿論この時はもう無數の神兵も、吹き渡る夜風の音と一しよに、夢のやうに消え失せた後だつたのです。

北斗の星は又寒さうに、一枚岩の上を照らし始めました。絶壁の松も前に變らず、こうこうと枝を鳴らせてゐます。が、杜子春はとうに息が絶えて、仰向けにそこへ倒れてゐました。

五

杜子春の體は岩の上へ、仰向けに倒れてゐましたが、杜子春の魂は、靜に體から拔け出して、地獄の底へ下りて行きました。

この世と地獄との間には闇穴道といふ路があつて、そこは年中暗い空に、氷のやうな冷たい風がびゆうびゆう吹き荒んでゐるのです。杜子春はその風に吹かれながら、暫くは唯木の葉のやうに、空を漂つて行きましたが、やがて森羅殿といふ額の懸つた立派な御殿の前へ出ました。

御殿の前にゐた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐにそのまはりを取り捲いて、階の前へ引き据ゑました。階の上には一人の王樣が、まつ黑な袍に金の冠をかぶつて、いかめしくあたりを睨んでゐます。これは兼ねて噂に聞いた閻魔大王に違ひありません。杜子春はどうなることかと思ひながら恐る恐るそこへ跪いてゐました。

「こら、その方は何の爲に、峨眉山の上へ坐つてゐた？」

閻魔大王の聲は雷のやうに、階の上から響きました。杜子春は早速その問に答へようとしましたが、ふと又思ひ出したのは、「決して口を利くな。」といふ鐵冠子の戒めの言葉です。そこで唯頭を垂れた儘、啞のやうに默つてゐました。すると閻魔大王は、持つてゐた鐵の笏を擧げて、顏中の鬚を逆立てながら

「その方はここをどこだと思ふ？　速に返答をすれば好し、さもなければ時を移さず、地獄の呵責に遇はせてくれるぞ。」と、威丈高に罵りました。

が、杜子春は相變らず唇一つ動かしません。それを見た閻魔大王は、すぐに鬼どもの方を向いて、荒荒しく何か言ひつけると、鬼どもは一度に畏つて、忽ち杜子春を引き立てながら、森羅殿の空へ舞ひ上りました。

地獄には誰でも知つてゐる通り、劍の山や血の池の外にも、焦熱地獄といふ焰の谷や極寒地獄といふ氷の海が、眞暗な空の下に並んでゐます。鬼どもはさういふ地獄の中へ、代る代る杜子春を抛りこみました。ですから杜子春は無殘にも、劍に胸を貫かれるやら、焰に顏を燒かれるやら、舌を拔かれるやら皮を剝がれるやら、鐵の杵に搗かれるやら、油の鍋に煑られるやら、毒蛇に腦味噌を吸はれるやら、熊鷹に眼を食はれるやら、――その苦しみを數へ立てゐては、到底際限がない位、あらゆる責苦に遇はされたのです。それでも杜子春は我慢强く、じつと齒を食ひしばつた儘、一言も口を利きませんでした。

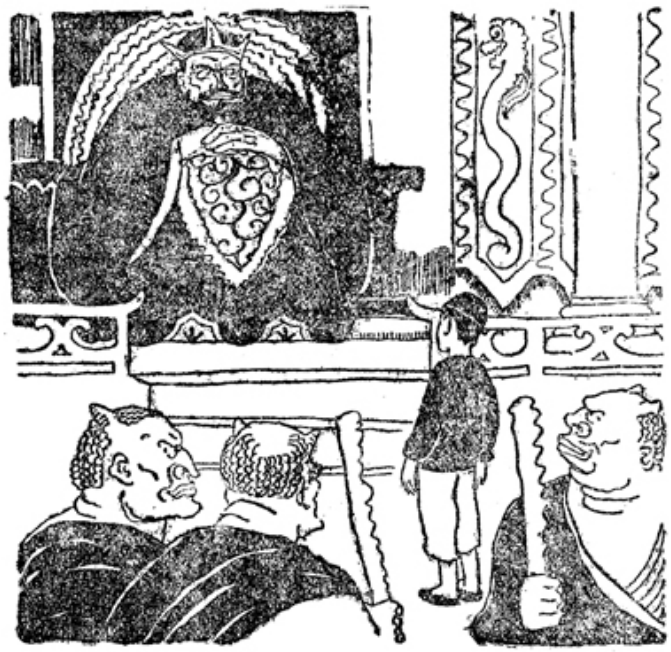
これにはさすがの鬼どもも、呆れ返つてしまつたのでせう。もう一度夜のやうな空を飛んで、森羅殿の前へ歸つて來ると、さつきの通り杜子春を階の下に引き据ゑながら、御殿の上の閻魔大王に、

「この罪人はどうしても、ものを言ふ氣色もございません。」と、口を揃へて言上しました。

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れてゐましたが、やがて何か思ひついたと思えて、

「この男の父母は、畜生道に落ちてゐる筈だから、早速ここへ引き立てて來い。」と、一匹の鬼に言ひつけました。

鬼は忽ち風に乘つて、地獄の空へ舞ひ上りました。と思ふと、又星が流れるやうに、二匹の獸を驅り立てながら、さつと森羅殿の前へ下りて來ました。その獸を見た杜子春は、驚いたの驚かないのではありません。なぜかといへばそれは二匹とも、形は見すぼらしい痩せ馬でしたが、顏は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。



「こら、その方は何のために、峨眉山の上に坐つてゐたか、まつすぐに白狀しなければ、今度はその方の父母に痛い思ひをさせてやるぞ。」

杜子春はかう嚇されても返答をしずにゐました。

「この不孝者めが。その方は父母が苦しんでも、その方さへ都合が好ければ好いと思つてゐるのだな。」

閻魔大王は森羅殿も崩れる程、凄じい聲で喚きました。「打て。鬼ども。その二匹の畜生を、肉も骨も打ち碎いてしまへ。」

鬼どもは一齊に「はつ」と答へながら、鐵の鞭をとつて立ち上ると、四方八方から二匹の馬を、未練未釋なく打ちのめしました。鞭はりうりうと風を切つて、所嫌はず雨のやうに、馬の皮肉を打ち破るのです。馬は、――畜生になつた父母は、苦しさうに身を悶えて、眼には血の涙を浮べた儘、見てもゐらしません。

れない程、嘶き立てました。

「どうだ。まだその方は白狀しないか。」

閻魔大王は鬼どもに、暫く鞭の手をやめさせて、もう一度杜子春の答を促しました。もうその時には二匹の馬も、肉は裂け骨は碎けて、息さも絶え絶えに階の前へ、倒れ伏してゐたのです。

杜子春は必死になつて、鐵冠子の言葉を思ひ出しながら、緊く眼をつぶつてゐました。するとその時彼の耳には、殆聲とはいへない程、かすかな聲が傳はつて來ました。

「心配をおしてない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰つても、言ひたくないことは默つて御出で。」

それは確に懷しい、母親の聲に違ひありません。杜子春は思はず、眼をあきました。さうして馬の一匹が、力なく地上に倒れた儘、悲しさうに彼の顏へじつと眼をやつてゐるのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思ひやつて、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む氣色さへも見せないのです。大金持になれば御世辭を言ひ、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何といふ難有い志でせう。何といふ健氣な決心でせう。杜子春は老人の戒めも忘れて、轉ぶやうにその側へ走りよると、兩手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん。」と一聲を叫びました。

六

その聲に氣がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、長安の西の門の下に、佇んでゐるのでした。霞んだ空、白い三日月、人や車の波、――すべてがまだ峨眉山へ、行かない前と同じことです。

「どうだな。私の弟子になつた所が、とても仙人にはなれはすまい。」

片目眇の老人は、微笑を含みながら言ひました。

「なれませんが、しかし私はなれなかつたことも、反つて嬉しい氣がするのです。」

杜子春はまだ眼に涙を浮べた儘、しつかり老人の手を握りました。

「いくら仙人になれた所が、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を負つてゐる父母を見ては、默つてゐる譯には行きません。」

「もしお前が默つてゐたら――」と鐵冠子は急に嚴な顏になつて、じつと杜子春を見つめました。

「もしお前が默つてゐたら、私は即座にお前の命を絕つてしまはうと思つてゐたのだ。――お前はもう仙人になりたいといふ望も持つてゐまい。大金持になることは、元より愛想がつきた筈だ。ではお前はこれから後、何になつたら好いと思ふな。」

「何になつても、人間らしく、正直に暮して行くつもりです。」

杜子春の聲には、今までにない、晴れ晴れした調子が罩つてゐました。

「その言葉を忘れるなよ。では私は今暫眠り、二度とお前には遇はないから。」

鐵冠子はかう言ふ內に、もう歩き出してゐましたが、急に又足を止めて、杜子春の方を振り返ると、

「おゝ、幸、今思ひ出したが、おれは終南山の南の麓に一軒の家を持つてゐる。その家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住まふが好い。今頃は丁度家のまはりに、桃の花が、一面に咲いてゐるだらう。」

と、さも愉快さうにつけ加へました。（をはり）

附記

これは杜子春の名はあつても、名高い杜子春傳とは所々、大分話が違つてゐます。(三)のしまひにある七言絕句は、呂洞賓の詩を用ゐました。少年少女の讀者諸君には、「ちちんぷいぷいごよの御寶」と同じやうに思つて貰ひたいのです。